

目的 整容目的で着用される拘束衣服にブラジャー、ガードル、ボディースーツ、サポートパンストなどがある。本研究では、これら拘束衣服のうちガードルについて、整容のためにどの程度の被服圧が加わっているのか、定量性を高めるために、新しい被服圧測定法（流体圧法）と理論計算法を用いてガードルの被服圧を測定した。さらに、その着衣効果についても検討した。

方法 実験に使用した3種類のガードルは、拘束力がソフト、ミディアム、ハードと異なる素材である。理論計算法による被服圧は、kirkらの式に従い、ガードルに捺印した3cmの円上でたて、よこ方向の伸びと曲率から求めた。また、直接法である流体圧法による被服圧の測定は、45×45mmのテフロンシート袋に約5mlの空気を封入し（袋の厚さ、約2.5mm）、外径 $\phi=2$ mmのシリコンチューブで圧力センサに連結した装置を使用した。ガードルの着衣効果は、腹部および平均皮膚温を測定し検討した。

結果 理論計算法によるガードルの被服圧についてみると、ソフトタイプでは、腹部中央、両側部、臀部の被服圧が高い。この傾向はミディアム、ハードタイプでも同様であり、素材の異なるガードルの被服圧間に顕著な差は認められなかった。一方、流体圧法の結果についてみると、素材間の被服圧にわずかであるが差が認められた。理論計算法との比較では、ミディアム、ハードタイプのガードルにかなり良い一致が認められ、本実験に使用した流体圧法の有用性が確認された。